



男声合唱団 昂ニュース

No.820
2025.5.16

発行：男声合唱団 昂
レッスン会場：
大阪市中央区谷町7丁目1-39
谷町第2ビル308号 ねむかホール
連絡先：090-6058-5652(立川)



「偲ぶつどい」21名の遺影を飾って



ご遺族やOB、勤労協の中田先生とともに

星になった昂の仲間を偲ぶつどい

2025年4月20日、昂のホームグラウンドである「ねむかホール」で「星になった昂の仲間を偲ぶつどい」を開催しました。

昂が団を結成したのが2000年3月、この25年の間に判明しているだけで21人の仲間が鬼籍に入り、遺族の一人の方から「合同の慰靈祭をしては」と提言があり、もっともと思い行ったものです。

連絡が取れる遺族の方、長期に休団されている方、すでに昂を退いた方にも案内を送りました。その結果、遺族の方5人、長期休団の方2人、退いた方9人から参加するとの返事を頂きました。当初、こんなに多くの方から参加の返事が来るとと思いませんでした。来られたら何か持つて帰っていただきねばと思い、急きよ「昂25年のあゆみ」を作らせていただきました。

当日は2時に開会、「フィンランディア」を献歌、団長挨拶のあと、本並先生に作成していただいた鬼籍の名簿を中心とした映像を壁一面に映し出して仲間を偲び、その後は昂の演奏をはさみながら来ていただいた方にスピーチを頂きました。

その後、時間が許す方に本並先生からバトンが渡された坂井先生のレッスンの指導ぶりを見て頂き、5時からは近くの中華料理屋興隆園で交流を行い旧交を温めました。東京から参加された土肥先生から、遠いところから来た甲斐がありましたと、労っていただきました。後日、遺族の三村さんからお礼状を頂き、中谷さんからはお礼状と共に1万円のカンパを頂きました。

私たちの代では最初で最後の催し、何十年かして私たちを偲んでくれる人をつぐらねば、と強く思った催しでもありました。

岡邑洋介

5月～6月の活動予定 (会議を除く)

- | | | |
|---------|-------|---------------|
| 5/16(金) | 17:30 | 定例レッスン |
| 5/18(日) | 14:00 | 定例レッスン |
| 5/31(土) | 11:30 | 大阪母親大会文化行事出演 |
| 6/1(日) | 14:00 | 昂友の会例会 |
| 6/3(火) | 15:00 | T1. 2パートレッスン |
| 6/6(金) | 13:30 | 声楽中村教室 |
| | 17:30 | 定例レッスン |
| 6/10(火) | 13:30 | 声楽千秋教室 I |
| | 18:00 | Br. Bsパートレッスン |
| 6/15(日) | 14:00 | 定例レッスン |
| 6/19(木) | 16:30 | 声楽千秋教室 II |
| 6/20(金) | 17:30 | 定例レッスン |



前略

先日は「偲ぶつどい」にお招きいただきありがとうございました。又、この度は写真もお送りいただきまして、良い記念になります。

大変な準備をしていただきました上に、間近で皆様の歌声を聞くことができまして感激いたしました。

これからも昂のコンサートを楽しみにしております。

皆様にぐれぐれもよろしくお伝え下さい。

乱筆乱文乍ら御礼迄。

三村直子

男声合唱団昂の皆様へ

先日は久しぶりにねむかホールを訪れ、皆様の元気な顔どうた声を聴かせていただき、パワーをいただきました。

今後さらに前進できることを願って、気持ちばかりのカンパです。

運営費の足しにでもなれば幸いです。

中谷清一

出演予定

5/31(土) 大阪母親大会 文化行事に出演

クレオ大阪中央 (昼食は各自持参)

11:30～12:00 リハーサル 12:50～13:10 本番
衣装：赤シャツ、9条バッジ
演奏曲：アメイジング・グレイス、このみち、
わが母のうた、109台のベビーカー、昂

「どんと来い」「わが母のうた」歌の背景他 No.2

井上頼豊 (1972年発行「荒木栄作品集レコード解説書」より)

1962年九州のうたごえの会場で、はじめて“わが母のうた”の楽譜を見た時のいいしれぬ感動を私は忘れられません。作曲家が生涯に一曲書けるかどうかわからぬ、それほど密度の高い曲だということが、ひと目でわかりました。

この曲は今ではよく知られていますが、荒木栄のすべてを凝縮したこの短い曲を、その中味にふさわしい高さと深さとひろがりで歌いあげた演奏を、私はまだ知りません。おそらくうたごえ運動の、今後の大きな課題でしょう。

(チリスト。日本のチェロ界の先駆者。関鑑子と共にうたごえ運動の理論、音楽面の指導者として活動。)

こうや 神谷国善 (1985年発行「荒木栄の歌と生涯」より)

(1962年)8月中旬に入って、腹部の痛みがはげしくなり、長くつづくようになった。その中で、栄が尊敬する大先輩、上甲米太郎氏の還暦祝の12日が近づきつつあり、森田ヤエ子に託した詩に曲をつけて「上甲さんを生んだお母さんと上甲さんを育てた共産党をたたえた歌」として贈ろうと決意していた栄は、片手で腹をおさえながらもオルガンに向かった。

楽譜は、きっちりとした文字で三番までの歌詞がつけられ、「上甲米太郎の還暦に捧ぐ」としてあった。この歌は、米太郎氏のお母さんが一番喜んだという。戦争中、社会主義の息子をもって肩身の狭い思いをさせられたからである。

(「花をおくろう」は神谷氏の結婚に際して贈られた曲。元日本のうたごえ事務局長)

「わが母のうた」を歌うにあたって

私は尾上和彦さんや宝木実さんから、うたごえのソロの歌い手として、うたごえの歌をきちんと歌える歌い手になれと言われてきました。

千秋昌弘ソロコンサートでは、荒木栄の「わが母のうた」も持ち歌として演奏させていただきました。

森先生からは、ソロの時は合唱より半音か1音高く演奏して下さってたようです。

高音部の音を響かせてうたうことを心掛けましたし、会場にその響きが伝わったことを実感したときの喜び、そして「わが母」にいろんな思いを込めて歌ってきました。

自分一人の母を越え、大きな母を歌いました。働く者にとって温かく大きな母を。何回歌っても歌いきれない大きな母を。

今回は合唱の中で1番のみソロで歌う難しさもありますが、心をこめて歌いたいと思います。

千秋昌弘

荒木 栄 (「みんなでみんなで敵をうて」に対する森田ヤエ子のマンネリズム批判に対する反論の手紙(抜粋))

マンネリズムとは同じことのくり返しに伴う臭味のこと、新鮮味を失った安易主義的作曲のことだと思います。“みんなでみんなで”はリズムもメロディも確かに“手”“どんと来い”に似た、いわゆる日本民謡の田舎節(陽旋法)によるものです。ご承知のように、田舎節を構成する音階はラドレミソという半音を含まない五つの音から出来ていて、変化性のない、共通のメロディを生みやすい音階です。リズムに至っては、ほとんど例外なく、二拍子です。

形式上からいえば最もマンネリズムに陥りやすい田舎節を、ぼくはためらわずに使い続けています。なぜかというと、この形式の中に脈打っている民族の血、単純率直でおこりっぽくて情的な日本人的要素・庶民的風格をこよなく愛する心、大切にしようとする心、そこから芸術的に思想的に発展しようとする心を、ぼくは自分のものだけではないと信ずるからです。

人間がその感情と思想を芸術によって表現しようとするとき、自分の中に流れている民族性や生活感情で綴られている伝統としての形式によろうとすることは全く自然なことです。

“どんと来い”が決してすぐれた作品価値を持っていないにも拘らず、たくさんの人に喜ばれてうたわれている原因の一つはそのようなメロディの構成にあるからでしょう。

藤本 洋 (1980年発行「うたは闘いとともに」より)

三池闘争の序曲「どんと来い」

(1959年)9月に熊本において開かれた「第7回九州のうたごえ祭典」は、6千人を結集して開かれましたが、この祭典には国鉄志免・日鉄二瀬・三井三池の闘いを反映して全九州の燃え上がるよううたごえをあげました。この祭典の企画の責任者には荒木栄があたり、祭典の開幕にあたっての合唱曲「どんと来い」を作曲しました。

三池では九州のうたごえ祭典の直後、荒木栄の職場である三池製作所支部が三池労組を脱退するという分裂策動が起こりました。三池の全労働者と主婦たちは、大闘争を前にして、三池製作所支部が三池労組にふみとどまって団結して闘ってほしいという願いを持って、三池製作所の門の前にかけつけたのです。この時人々の前に現れたのは、22人のうたごえの仲間たちでした。荒木栄は「どんと来い」の歌を自分たちの決意としてうたつたのです。「どんと来い」は、三池全労働者の団結の歌となつたのです。

「どんと来い」の歌は、三池大闘争の出発の合図であり、決意の表明となって全山から全国へ広がっていきました。

「わが母のうた」

荒木栄は、米ノ山病院で息をひきとるまで歌曲創作を追求し続けました。この作品の中でも、森田ヤエ子作詞による「わが母のうた」は、民衆の偉大な闘いの姿を母にたとえた民族的な旋律による雄大な作品として、今日もわれわれの胸を打っています。

(元中央合唱団団長、日本のうたごえ全国協議会幹事長)